

◇国際会議報告◇

IFRS-AC 会議（2024 年 11 月）出席報告

日本公認会計士協会 相談役 関根 愛子

ニッセイアセットマネジメント(株) 執行役員 運用本部副本部長

井口 譲二

（報告者：関根愛子）

1. はじめに

IFRS 諮問会議（IFRS-AC）が、2024 年 11 月 12 日及び 13 日にロンドンにて対面会議で開催された。IFRS-AC は、IFRS 財団評議員会、国際会計基準審議会（IASB）及び国際サステナビリティ基準審議会（ISSB）に、戦略的な事項やその他優先事項をアドバイスするための諮問機関である。議長 1 名と委員 55 名の合計 56 名から構成され、先進国、新興国の財務報告関係者から幅広く選出されており、日本からは、日本公認会計士協会を代表する関根愛子と日本証券アナリスト協会を代表する井口譲二氏の 2 名が委員として参加している。また、金融庁より企画市場局企業開示課国際会計調整室長の倉持亘一郎氏がオブザーバーとして参加し、IASB より鈴木理加理事が出席した。

2. 全体のスケジュール

2024 年 11 月の会議の議事一覧は、下記図表のとおりである。

予定時間（ロンドン時間）	Agenda Paper 番号	議事
11 月 12 日		
9：30- 9：45	1	前回の会議からのアップデート
9：45-10：30	2	新 IFRS 財団マネジング・ディレクターの紹介
11：00-12：15	3	IASB の活動報告
12：15-13：00	4	IFRS 財団評議員会の活動報告
14：15-15：15	5	IASB 作業計画の優先事項：優先順位付けフレームワーク案
15：45-17：15	5	IASB 作業計画の優先事項：排出物価格設定メカニズム

17:15-17:30	—	議長によるまとめ等
11月13日		
9:30-9:35	—	議長による本日のアジェンダ紹介
9:35-10:45	6	ISSB の活動報告
11:15-12:15	7	IFRS 財団マルチロケーション・モデル
13:30-14:30	8	人材の誘致及び維持
14:30-15:00	—	議長によるまとめ等、閉会

本稿では、このうちの主な内容を説明するが、詳細な議事概要は、IFRS Advisory Council 2024 “Chairman’s Report IFRS Advisory Council November 2024” を参照されたいⁱ。

3. 議事概要

(1) IASB の活動報告 (AP3)

Andreas Barckow IASB 議長より、①2024 年 4 月から 10 月までの基準設定活動、②コネクティビティ (IASB と ISSB との協働)、③IASB の戦略-3.0 世代 (2024 年 4 月に議論) について説明された。

IFRS-AC メンバーからは、無形資産 (暗号資産、概念フレームワークとの整合性等を含む)、キャッシュ・フロー計算書、コネクティビティ、動的风险管理、公開草案「財務諸表における気候関連及びその他の不確実性」、超インフレーション、経営者による説明などについて様々な意見が述べられた。

倉持氏より、「IASB の無形資産プロジェクトと ISSB の人的資本プロジェクトが同時進行しているが、これらのトピックは関連しており両ボードが協調する良い機会である。また、優先順位付けでは新たな問題解決に焦点が置かれているが、証券監督当局の観点からは、現在のプロジェクト、特に、too little, too late の問題への対応も期待される企業結合プロジェクトは重要である。企業結合プロジェクトは、無形資産プロジェクトとも関連性があるのではないか。」と述べられた。

(2) IASB 作業計画の優先事項 (AP5)

IASB スタッフより、IASB は 5 年毎のアジェンダ協議の過程で優先すべきプロジェクトを決定する一方、アジェンダ協議後の 5 年間に利害関係者等から新たなプロジェクトの追加要請がある場合、包括的な優先順位付けについての考え方が協議されていないため、デュー・プロセ

ス・ハンドブックの要求事項や第3次アジェンダ協議で適用した規準等から、アジェンダ協議後5年間の優先順位付けのフレームワークを開発していることが説明された。さらに、排出物価格設定メカニズム（PPM）プロジェクトについて、当該フレームワーク案の規準に従った検討内容が示され、次回のアジェンダ協議期間（2027年－2031年）よりも前に開始すべきか否かについての見解が求められた。

フレームワーク案については、IFRS-ACメンバーからは支持された一方、判断の問題であること、特定法域が選好するプロジェクトがあること、プロジェクト中止の原因分析やプロジェクトの中止・一時停止・再開の規準が必要であること、プロジェクト追加には高いハードルを設定すべきであること等、様々な意見が述べられた。

井口氏より、「フレームワーク案は合理的に見えるが、現在のプロジェクトの遅延など、どのような影響を及ぼすのか懸念がある。」と述べられた。

報告者（関根）は、「フレームワーク案は合理的な形で上手く取り纏められているが、優先順位付けは最終的には判断の問題となるため、フレームワークを決めたとしても、それを活用してのデュー・プロセスに基づく十分な議論が必要となるであろう。」と発言した。

PPMプロジェクトについては、一部のIFRS-ACメンバーからは即時の開始が支持されたが、追加する場合、複数の現在のプロジェクトの中止が条件とされていることや、前回のアジェンダ協議からPPMの状況が大きく変化したのか明確ではない等を理由として多くのIFRS-ACメンバーから支持されなかった。一部のIFRS-ACメンバーからは、事業セグメント、超インフレーションの重要性が主張された。

井口氏より、「PPMはそれほど重要ではない。リソースなどを注意深く考慮すべきである。次回のアジェンダ協議に延期すべきである。」と述べられた。

報告者（関根）は、「PPMプロジェクトの重要性は理解しているが、前回のアジェンダ協議から優先順位付けを変更して追加するだけの重要性や緊急性が果たしてできてきているのかと思っている。キャパシティ不足が懸念され、無形資産などの現在のプロジェクトに専念する方が重要であると思う。PPMは、いずれにせよ長期の基準開発となると考えられるため次回のアジェンダ協議まで待つことで良いのではないか。」と発言した。

(3) ISSBの活動報告（AP6）

Sue Lloyd ISSB副議長より、ISSBの活動報告として、2024年4月のIFRS-AC会議以後の動きについて、ISSBの3つの優先事項であるIFRS S1号及びS2号の適用、アドプション、作業計画を中心に説明された。また、複数の機関との戦略的関係性の構築が進んでいることも紹介された。

IFRS-AC メンバーからは、能力開発や教育文書、各法域での導入状況、EFRAG や GRI との相互運用可能性など、様々な質問が提起されて議論が行われた。

倉持氏より、「日本では IFRS サステナビリティ開示基準（ISSB 基準）とほぼ同等な基準の開発が進められている。ISSB による教育文書を開発を評価しており、ステークホルダーが疑問を持つ部分に対する更なる対応を期待。また、様々な団体との協力関係も評価しており、特に域外企業向け ESRS との相互運用可能性の確保を期待したい。最後に、日本では人的資本開示において統合報告フレームワークも踏まえ、価値創造に焦点を当てる開示実務も浸透している。IASB と協働し、投資家が必要とする情報開示に資する基準開発を期待する」との発言があった。

また、報告者（関根）は、「基準開発を進めている日本においても ISSB の教育文書に期待する声もきかれているが、その開発状況を教えて欲しい」と発言した。副議長からは、教育文書は様々な関係者からの声とニーズを集めて開発を続けたいとの回答があった。

(4) IFRS 財団マルチロケーション・モデル（AP7）

IFRS 財団スタッフより、ISSB のマルチロケーション・モデルの背景、現在の体制について説明された。また、IFRS 財団が今後の成長と業務効率化を支援するための強化策を模索している中で、今後の展開についての見解が求められた。

IFRS-AC メンバーからは、世界に拠点があることで各地域における ISSB 基準の採用支援が可能となる等のマルチロケーション・モデルによるベネフィットが述べられ、一方で、複数の事務所を維持するために必要な間接費及びインフラ費用は比較的高額となり、また、異なるオフィスに勤務するチームメンバー間の直接的な交流が制限される等、当該モデルの課題について述べられた。

報告者（関根）は、「コストやコミュニケーション問題は理解するものの、マルチロケーション・モデルとして出発した ISSB が設立されてからまだ3年であり、また、ISSB 基準の世界中での適用を促進している今、IASB のような一拠点モデルに変更するのは時期尚早ではないか。各拠点で会合を開く等、マルチロケーション・モデルを利用して、世界中での基準の適用を進めるべきである。」と発言した。

(5) 人材の誘致及び維持（AP8）

IFRS 財団スタッフより、IFRS 財団のバリュープロポジションを強化して人材を惹きつける方法、また、IFRS 財団を支援するためにグローバルな人材をより効果的に活用する方法について意見や提案が求められた。IFRS-AC メンバーからは、報酬・福利厚生の実、AI の活用、選考プロセスの改善等、様々な意見が述べられた。

報告者（関根）は、「人材の誘致及び維持については、長期的視点で考えることも重要である。現在大学で会計を教えているが、基準設定の世界は、ほとんどの学生に知られていない。ただ説明すると興味を持つ学生は少なくないので、基準設定の魅力が若い世代に伝わっていないのではないかと感じている。報酬、福利厚生等を充実させることも重要だが、アウトリーチ等を通して基準設定の魅力を若い世代に伝えていくことがより重要ではないか。」と発言した。

4. 次回の予定

次回の IFRS-AC は、2025 年 4 月に開催される予定である。

5. おわりに

IFRS 財団マネジング・ディレクターに就任した Michel Madelain 氏は、その挨拶の中で、日本・中国などアジアへの訪問により、欧州等と同様に IASB は強力なフランチャイズを構築していることは明白であること、また、IASB と ISSB の協調が IFRS 財団の成功に大きく貢献することが述べられた。

両ボードのコネクティビティを活かした 1 つの IFRS 財団としての基準設定に今後も期待したい。

ⁱ IFRS 財団ホームページ [meeting-summary.pdf](#) 参照